

「新渡戸国際塾」小論文 課題

以下は、新渡戸稲造、渋沢栄一、明石康各氏の著書からの引用です。3つの文章全てを読み、同意する点、異論がある点などにも触れながら、今後、世界の中で、日本または日本人に求められる役割について自分の考えを書いて下さい。日本人でない応募者は、世界における自分の国の役割について述べても結構です。(2,000 字以内/A4 用紙に印字)

新渡戸稲造氏

「今後東西相触れる機の益々増加するに際し、お互に或は敵愾心を以て相接し猜疑心を以て相当れば、互に真相を得ずして、誤解は益々深まり、国交上に不幸を来すの憂がある。虚心坦懐、表面上の事情や形式を捨て去り、人間といふ共通の立場に立つて国際的諒解に力め且つ之を進むことが現代及び将来の我国人の為すべきことで、東西を相結びつけるのが邦人の義務ではあるまいか。」（『東西相触れて』自序より）（『新渡戸稲造全集 第一巻』150ページ。初出：1928（昭和3）年、実業之日本社）

渋沢栄一氏

「それにつけても目下の内外多端の重大事局に際会して、国民は挙って国力の充実を期する事に精進しなければならぬと思う。国力が充実していなければ、動もすると外に侮りを受ける。然るに国内状態を見るに、政治家は徒に内争を事として、外を顧るの暇なき有様である。又実業界にしても、蝸牛角上の争いを事として眼を大局に注ぐことを怠っている憾がある。汽船会社にしても、銀行にしても、紡績業にしても、また電力会社や砂糖会社にしても、事業合同の余地は頗る多いのである。而して一個人乃至一会社の利害より打算せず、又私情に囚われることなく、国家社会という高所大局より誠意を以て之に当る時は、多少の困難な事情があるとしても、事業合同は十分に行い得る可能性があるだろうと信ずる。言うまでもなく今日は一郡一村が単位でなく、国家が単位であり、且つ世界は共通であるべき筈である。此の意味に於いて私は今日の重大時局に際し、国民に対して世界人としての国民性を涵養せんことを切望すると同時に、禍を転じて福となすの誠意努力を望むものである。」（渋沢栄一講述、小貫修一郎編著『渋沢栄一自叙伝』、1937（昭和12）年、偉人烈士傳編纂所、945ページ）

明石康氏

「私は民主主義、平和主義、国際主義という、戦後日本の憲法を流れる基本的な理念は正しいものだと思っている。一部の日本人のように、それがアメリカ人の影響下に起草されたものだからといって、一概に憲法の思想や理念の正しさを否定してはいけないと考えている。この憲法の基本原則は、国民の辛い戦争経験や、わが国と戦った多くの国々の人々の苦痛や悲劇によって支えられている貴重な価値だといってよい。

しかし、戦後憲法は日本人の中に平和主義を育んだが、それは平和を信じ、それを祈りさえすれば平和が到来するという安易な態度も育てていった。だが平和は時として、自ら克ち取らなければならないものである。また、戦後日本は国連に加盟することによって、国連憲章と日本国憲法の整合性を信じることとなったが、国連憲章第七章に含まれる平和不可分の考え方、言い換えると国際社会全体による集団安全保障の考えは、かなり厳しい要求を含んでおり、受動的に何もしない内向きの平和主義とは性格の異なるものである。

戦後日本に流れてきた軍国主義への強い不信は、昭和時代における国民の厳しい経験に根ざした深い信念であり、決して捨てるべきものではないが、軍人というものの社会における存在や一定の役割を認めないことは、世界の現実と合わないのではあるまいか。そうした態度は、国連の集団安全保障に一役を担わされているわが国の立場とも合致するものではないように思われる。」（明石康著『戦争と平和の谷間で一国境を超えた群像』、2007、岩波書店、100-101 ページ）